

# ～ 輝きの子育て～

## 懐かしい「仰げば尊し」の卒業の歌

本年度も最後の月を迎えることになりました。いよいよ進学、進級を迎えます。どの子も心はずむ気持ちで新しい年度を迎えて頂けたらと思います。

この時期、私自身の小、中、高の卒業式の思い出がよみがえってきます。卒業式の歌と言えば「仰げば尊し」でした。この歌にはいろんな意味で心動かされ感動し、新たな出発に向かって優しい勇気を与えてくれたものです。

最近、歌われなくなったのはどうしてだろう？と調べていたのですが、ある文庫本に適切な文面が載っていましたので一部省略させて頂きますが掲載させていただきます。

卒業式シーズンがやって来た。日本中の至る所で、卒業生が私の大好きな文部省唱歌「仰げば尊し」を歌っているのだろう、と想像していたらそうでもないようだ。中学校や高校では「旅立ちの日に」という歌の方が人気という。埼玉県の中学校の先生が作ったそうだ。

明治以来の「仰げば尊し」の人气が落ちた理由は三つあるという。

一つ目は「いと疾し」「今こそ別れめ」「やよ忘るな」などの文語が難しいということらしい。文語だから良いのだ。文語は明治大正昭和の豊饒な日本文学を産んだ言葉で、日本人なら少しずつ慣れていかねばならぬものである。「仰げば尊し」は子供達が本格的な文語に触れる最初の機会なのだ。「難しいから歌わせない」が通るなら漢字も数学も「難しいから学ばせない」となる。たとえ難しくても、教えるべきものは教えねばならない。

第二の理由は「仰げば尊しわが師の恩」は先生への感謝の念を生徒に押しつけている、ということらしい。杞憂だ。小中高とこれを歌ってきた私自身、押しつけがましいなどと思ったことは一度もない。それに、学校で先生が生徒に敬われ、家で親が子に敬われるのは人間のあるべき姿である。

第三は「身を立て名を上げ」が、立身出世を奨励していて民主的でないということらしい。身を立て名を上げとは、「大成する」「一角の人物になるひとかど」の意味だ。大成を望むことのどこに問題があるのだろう。民主主義のチャンピオンのアメリカでは、ほとんどすべての子供が大成を望んでいる。「大統領になりたい」「企業を起し億万長者になりたい」「エジソンのような大発明家になりたい」などと口々に言う。

どんなものであろうと、子供が大志を胸に抱き、それに向かって頑張ることは実に素晴らしいことだ。その過程で夢破れ挫折することすら、後となつては人生の懐かしいドラマでありエピソードとなる。

大成を夢見ることのどこが非民主的なのだろうか。子供達が大志も抱けないような社会は、活力のない末期的社会だ。「プロサッカー選手になりたい」「先祖伝来の農業を継いで日本一おいしい野菜や米を育てたい」など何でもよい。すべての子供が大志を抱くよう指導するのが教師の役目ではないのか。

実は私が「仰げば尊し」で最も感動する部分はまさに、「身ウオー一立て」のウオーの部分でトーンが一気に高くなると同時に、こちらの気分も高揚し涙がこみ上げる。小学校でも中学でも高校でも同じだった。級友を見てもこの辺りで鼻や目をこすり始める。反戦映画の「二十四の瞳」には「仰げば尊し」を歌う場面があるが、やはり同じだった。

本当のことを言うと、私はこの歌の歌詞を押しつけとも立身出世とも思わなかったどころか、高校生になっても意味さえよく分かっていなかった。涙がこみ上げたのは、もの悲しい調べの中で、「別れ」がこらえ切れないほどに悲しかったのだ。先生や友達との別れではない。先生や友達なら卒業した後でも気が向けばいつでも会える。「別れ」そのものが悲しかった。歌詞など分かるはずのない小学六年生でも、多くは「仰げば尊し」で涙を流す。彼等も「先生や友達と別れること」でなく「別れ」が辛いのだ。

過去を振り返ると印象に残る悲しみというものはどれも「別れ」と関わっていたような気がする。人生とは別れの堆積なのだ。子供達も人間のこの根源的な悲しみに薄々気付いているのではないか。

そう思うから、「仰げば尊し」で涙する子供達を見るたびに私まで感動する。

片野 英子

2015年3月16日号「できすぎた話」 藤原 正彦 著 新潮文庫

### 仰げば尊し

作者不詳

あおげば 尊し わが師の恩  
教への庭にも 早やいくとせ  
思えばいと疾し この年月  
今こそ 別れめ いざさらば

互いに おつみし 日ごろの恩  
別れるる 後にも やよ忘るな  
身を立て 名をあげ やよはげめよ  
今こそ 別れめ いざさらば

朝夕 なれにし まなびの窓  
ほたるのともしび つむ白雪  
忘るる 間ぞなき ゆく年月  
今こそ 別れめ いざさらば